

少年の日の思い出（ヘルマン・ヘッセ）

井上 小夜、加藤 修治、中山 莉麻、野田 奏恵



一 作者と作品について

ヘルマン・ヘッセ（一八七七～一九六二年）はドイツ文学を代表する作家である。一九四六年に『ガラス玉演戯』などの作品でノーベル文学賞を受賞した。

ヘッセは一八七七年ドイツ南部のバーデン＝ヴュルテンベルク州のカルフに生まれた。十四歳でヴュルテンベルク州試験に合格し、マウルブロン神学校に入学するが半年で脱走する。悪魔祓いや自殺未遂の後シュテッテン神経科病院に入院した。このころの経験が『車輪の下』の元になっているといわれる。

一九〇四年にマリア・ベルニリと結婚し、三人の子供をもうける。この頃のヘッセの作品はノスタルジックで牧歌的な作品が多い。

『デミアン』執筆後、ヘッセは精神的危機を経験し、その後の作品には現代文明への強い批判と洞察が多く書かれた。

ナチス政権下ではヘッセの作品は「時代に好ましくない」とされたが、一九四六年にはノーベル文学賞とゲーテ賞を受賞した。

主な作品として『車輪の下』『春の嵐』『デミアン』『郷愁』『荒野の狼』『ガラス玉演戯』などがある。

訳者の高橋健二（一九〇二年～一九九八年）は、ドイツ文学研究者である。東京帝国大学ドイツ文学科卒業後、一九三一年にドイツへ留

学する。ヘルマン・ヘッセなどの作品の翻訳・紹介につとめた。一九五七年には、ドイツ文学を紹介した業績で読売文学賞を受賞した。一九六一年『ヘッセ研究』で東京大学文学博士となる。一九六三年、『ケストナー少年文学全集』により産経児童出版文化賞受賞、一九六八年には『グリム兄弟』で芸術選奨文部大臣賞を受賞する。一九六九年に日本芸術院賞を受賞、一九八五年には文化功労者とされた。

「少年の日の思い出」は一九三一年にヘルマン・ヘッセが発表した短編小説である。日本では一九三二年に高橋健二の翻訳が出版され、「少年の日の思い出」と邦題が付けられている。「少年の日の思い出」は現在日本でしか読むことは出来ない。この作品は日本で多く読まれているのにも関わらず、ドイツでは殆ど知られていない。この作品の初稿は一九一一年に発表された「クジヤクヤママユ」であり、ドイツで収録されているのは全てこの初稿である。

教科書には一九四七年に国定教科書に掲載され、その後現在に至るまで六五年間以上、中学校国語科教科書に掲載され続けている。

二 叙述について

客は、夕方の散歩から帰って、わたしの書斎でわたしのそばに腰かけていた。

「わたしのそば」から客とわたしは親しげである。「夕方」という表現は、薄暗く、しんみりとした雰囲気を持っている。これから起こることは、決して明るいことではない、ということが予測される。「夕方の散歩から帰ってきて」というところから、客は夕方に訪ねてきたわけではなく、夕方以前に訪ねてきた。「わたし」の重複から、文的に客が主体ではあるが、「わたし」も強調している。

昼間の明るさは消えようとしていた。

前文の「夕方」とこの文の「昼間の明るさ」とから、明暗の対比が読み取れる。これからの場面が「夜」に変化していくことを際立たせると同時に、雰囲気も静かで暗くなっていくことが読み取れるような表現である。

窓の外には、色あせた湖が、丘の多い岸に鋭く縁取られて、遠くかなたまで広がっていた。

一見穏やかな情景描写であるが、「鋭い」という言葉により、穏やかな中にも何か穏やかでないことがあるのではないかということが考えられる。つまりこの場合、良い思い出の中に、ふと隠れていたエーミールの思い出のことである。

ちょうど、わたしの末の男の子が、おやすみを言ったところだったので、わたしたちは、子供や幼い日の思い出について話し合った。

幼い日の思い出という表現は本編への導きである。時間は、子供が寝る時間であるため、夜九時ごろだろうか。

「子供ができてから、自分の幼年時代のいろいろの習慣や楽しみごとが、またよみがえってきたよ。」

「幼年時代の」というところは、子供のころの自分へと気持ちに戻っていく様子を示しており、幼年期の話をする前置きとなっている。

それどころか、一年前から、僕はまた、ちよう集めをやっているよ。

「ちよう集め」が不意に出てきた、というところからキーワードであることが推測できる。気になるところか、またやりたくなったり、幼帰りしている気分である。また、本来大人のすることじゃないと思っていることも読み取ることができる。「一年前」ということから、子どもが産まれてから一年以上たっていることが分かる。おやすみを言っているところから三歳以上だと推測できる。

お目にかけてようか。」と、わたしは言った。

「わたし」は「客」に見せたい。少し興奮気味でわくわく感が伝わってくる。

彼が見せてほしいと言ったので、わたしは、収集の入っている軽い厚紙の箱を取りに行った。

「見せてほしい」という表現から、「わたし」が見せたいだけではなく、彼が言ったから見せた、ということがわかる。後の、「結構」というセリフの矛盾につながり、その矛盾を強調している。

最初の箱を開けてみて、初めて、もうすっかり暗くなっているのに気づき、わたしは、ランプを取ってマッチをすった。

「最初」は二つ目の箱が存在することを示しており、相当ちよう集めに没頭していることがわかる。「箱を開けてみて」から、明かりが少なく、箱の中が見にくかったことが伺える。それに気付かないほど、今までの話に「わたし」が夢中であった。周りの暗さとマッチの灯り（対比）が、少し怪しげで不安定な様子を表現している。

すると、たちまち外の景色はやみに沈んでしまい、窓全体が不透明な青い夜の色に閉ざされてしまった。

「たちまち」とあるので、すぐに、あつという間に。マッチをすったことで、あつという間に外の景色はやみにしずんでしまった。「窓全体が不透明な青い」という色は、これからの話の内容を暗示しているかのようなのである。

わたしのちようは、明るいランプの光を受けて、箱の中から、きらびやかに光り輝いた。

「明るい」「きらびやかに」は、華やかさを出しており、ちようの持つ魅力を示している。わたしがちようを大切にしていることがよくわかる。ちようはわたしにとってキラキラした存在なのだろう。また、「きらびやかに」は、ランプの光だけではなく、自分の宝物という意味の輝きを表現している。

わたしたちは、その上に体をかがめて、美しい形や、濃い見事な色を眺め、ちようの名前を言った。

大人二人が箱の中のちようの「上に体をかがめて」いる姿は、不自然である。二人の幼い行動から、二人がとてもちように心を奪われて

いることが分かる。

「これは、ワモンキシタバで、ラテン名はフルミネア。ここらではごく珍しいやつだ。」と、わたしは言った。

「珍しい」という表現が、物語の本題への伏線となっていると考えられる。「わたし」の珍しいものを少し自慢したいという気持ちが表現されている。

友人は、一つのちようを、ピンの付いたまま箱の中から用心深く取り出し、羽の裏側を見た。

ちようのもろさを表す一文。「用心深く」から、「客」も幼少期にちよう集めをやっていたことが分かる。ちようを慎重に取り出し、羽の裏側を見ることは普通しない。なぜ、ちようの裏側を見たのか。ちようを見たのではなく、そのちようを通して昔のものを見ていたのではないか。

「妙なものだ。ちようを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそそられるものはない。

「妙な」とあり、幼少期の思い出なら他にもあるだろうに、ちように反応してしまう自分を不思議に思っている。

僕は、小さい少年のころ、熱情的な収集家だったものだ。」

「だったものだ」とあるので、「わたし」と違って客は今では収集していない。

そして、ちようをまた元の場所に刺し、箱のふたを閉じて、「もう、結構。」と言った。

ふたを閉じるということは、もう見たくないということ。急に不機嫌になっている感じを受ける。何があった？と読み手に思わせる一文。もう満足……というより目を背けた様子を思い浮かべる表現である。ふとある事を思い出してそれを払いのけるような感じ。

その思い出が不愉快でもあるかのようには、彼は口早にそう言った。

「不愉快」から、はきすてるように言ったことが表現されている。「あるかのように」は八割方そのようであるという意味であり、したがって、間違いなく不愉快である。

その直後、わたしが箱をしまつて戻つてくると、彼は微笑して、巻きたばこをわたしに求めた。

自分の嫌な態度を反省し、取り繕うように「わたし」に頼みごとをしている。「微笑」とあるので、取り繕うような様子と、冷静な客の様子が分かる。「たばこ」からは、落ち着いている様子を受ける。

「悪く思わないでくれたまえ。」と、それから彼は言った。

悪く思われることをしたと思つている。人の自慢話の腰を折つたことに対しての謝罪。

「君の収集をよく見なかったけれど。」

「わたし」が見せたがった気持ちに気付いている。「よく見なかった」ということから、上の空で、回想しながらちようをぼんやり見ている

ことが分かる。

僕も子供るとき、むろん収集していたのだが、残念ながら自分でその思い出をけがしてしまった。

「思い出をけがしてしまった」から、彼の中で思い出が美しくよみがえるのではなく、汚れを感じた出来事であることが分かる。「むろん」とあるので、子供の中ではちよう集めが当たり前であったことが読み取れる。

実際、話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう。」

恥ずかしいが、言ってしまうと不思議とすつきりした気持ちになると思つたため、勢いで言おうとしている。

彼は、ランプのほやの上でたばこに火をつけ、緑色のかさをランプに載せた。

光により、暗さを強調している。再び灯りの不安定さから、物語が沈んでいくことを示す。ゆっくり話をするため、雰囲気作り、準備をしているのだろう。「たばこ」は長い時間、ゆっくりのイメージ。

すると、わたしたちの顔は、快い薄暗がりの中に沈んだ。

明るい話ではない。「わたしたちの顔」から、改めて二人でいるという感じを感じる。「快い」とあるので、適度な暗さで心地よい。昔の思い出話という快い時間の中の、けがしてしまった思い出の部分が強調されている。

彼が開いた窓の縁に腰かけると、彼の姿は、外のやみからほとんど見分けがつかなかった。

今の「彼」が見えないことで、昔の話をすることが強調されている。「やみ」という表現から、やはり明るい話ではないということが分かる。

わたしは葉巻を吸った。

「わたし」は「客」の話をゆっくり聞くんもりである。

外では、かえるが、遠くから甲高く、やみ一面に鳴いていた。

甲高いかえるの声と静かで暗い部屋。その対比が不穏さを表している。聴覚を入れることにより、これから語りに入るということ暗示している。

初めは特別熱心でもなく、ただ、やはりだったのでやってきたまだけだった。

「はやりだったから」から「とりこになる」そこには何かきっかけがあったのか。後に述べられる、ちょうについて細かな記述がとりこになるきっかけなのではないか。

ところが、十歳ぐらいになった二度目の夏には、僕は全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、そのため、ほかのことはすっかりすっぱかしてしまったので、みんなは何度も、僕にそれをやめさせなければならぬまい、と考えたほどだった。

当時の彼にとって、「ちょう集め」の大切さがひしひしと伝わってく

る。どれだけ熱中していたかが伺える。

ちょうをとりに出かけると、学校の時間だろうが、お昼御飯だろうが、もう、塔の時計が鳴るのなんか、耳に入らなかった。

時間についての記述ばかりであることから、時間を忘れるほど、また、時間が無限に感じるほど、没頭していたことが分かる。

休憩になると、パンを一切れ胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩くことがたびたびあった。

前文の、時間についての記述の具体例となる一文である。

今でも、美しいちょうを見ると、おりおり、あの感情が身にしみて感じられる。

今となつては思い出はよみがえってくるものの、当時の情熱は取り戻すことも感じることもできない。「身にしみて」とあるので、大人になつて思っているというよりは、子供のころの感覚が戻ってきている様子。

そういう場合、僕はしばしの間、子供だけが感じることでできる、あのなんともいえない、むさぼるような、うっとりした感じに襲われる。

「なんともいえない」とあり、やめられない、やみつきになるあの感覚は、人にわからないでも、自分の中ですべてを占めるほどのワクワク、ドキドキ感のことである。

少年のころ、初めてキアゲハにしるび寄った、あのとき味わった気持ち

だ。

昔は何度も「なんともいえないうつとりした」瞬間を感じていた。「あのとき」で、今と昔の対比をしている。その気持ちを「わたし」と共有するための例としての話である。

また、そういう場合、僕は、すぐに幼い日の無数の瞬間を思い浮かべるのだ。

「すぐに」とあるので、すぐ頭に出てくる位、今もあざやかな思い出である。無数と言えるほど、ちよりの思い出があるということはいかに長い期間ちよりに熱中していたのかが分かる。

強くにおう、乾いた荒野の、焼けつくような昼下がりに、庭の中の涼しい朝、神秘的な森の外れの夕方、僕は、まるで宝を探す人のように、網を持って待ちぶせていたものだ。

句点が多く、記述が細かであり、いきいきとした思い出として表現されている。美しい思い出であったことが読み取れる。「宝を探す人」という表現から、ちよりを切望していることが分かる。

そして、美しいちよりを見つけると、特別に珍しいのでなくたってかまわない、ひなたの花に止まって、色のついた羽を呼吸とともに上げ下げしているのを見つけると、とらえる喜びに息もつまりそうになり、次第にしのび寄って、輝いている色の斑点の一つ一つ、透き通った羽の脈の一つ一つ、触角の細いとび色の毛の一つ一つが見えてくると、その緊張と歓喜ときたらなかった。

つかまえる時間が「僕」にとってどれほど大切な時間であったかが

分かる。細やかな所作の一つ一つ詳しい描写により、緊迫感やそれに伴うワクワクした思い、胸の高まりを味わえる。「ひなたの花」に止まっているちよりは、「僕」にとって手に入れたものである。「ひなた」という言葉により、ちよりが明るく浮かび上がっている様子が思い浮かぶ。

そうした微妙な喜びと、激しい欲望との入り交じった気持ちは、その後、そうしたたびたび感じたことはなかった。

「そうしたたびたび」とあるので、たまに感じることはある。幼い「僕」は感じられたが、今は滅多に感じられない日々である。大人になるまでの人生でも、ちよりの収集に勝るものはあまりなかった。幼少期の特別感を表している。

僕の両親は、立派な道具なんかくれなかったから、僕は、自分の収集を、古いつぶれたボール紙の箱にしまっておかなければならなかった。

親に対する不満感を示している。客にとってのちよりの宝。「おかなければならなかった」とあるので、それをみすぼらしい箱に入れられないといけないという辛さがよく表されている。

瓶の栓から切り抜いた、丸いコルクを底にはり付け、ピンをそれに留めた。

よい道具なんて全く使わなかったことが分かる。

こうした箱のつぶれた縁の間に、僕は、自分の宝物をしまっていた。

みすぼらしくても、宝物をしまっていたということから、自分で作

った収集箱なので、より一層愛着がわいていることを表している。質素ではあるが、その質素さから、中にある宝物というものを引き立てている。宝と箱の対比。

初めのうち、僕は、自分の収集を喜んでたびたび仲間に見せたが、ほかの者は、ガラスのふたのある木箱や、緑色のガーゼをはった飼育箱や、そのほかぜいたくなものをもっていたので、自分の幼稚な設備を自慢することなんかできなかった。

他の子の収集の箱に対する劣等感をかなり感じており、自分なんか…と少しずつひねくれていく。自分の作った箱を恥ずかしく思っている。

ここで、みすばらしい設備と言わずに「幼稚な設備」と言っているのはなぜか。幼い子どもは、しっかりとしたものをプラスにとらえるため、手作りの設備というものが恥ずかしく、その恥ずかしいと思う気持ちが込められているため、幼稚という表現をしたのではないか。

それどころか、重大で、評判になるような発見物や獲物があっても、ないしよにし、自分の妹たちだけに見せる習慣になった。

自分の手作りの箱を見せないどころか、自慢できるはずの発見したちようもみせなかった。その見せないようにしていたことが、秘密という甘美な感覚に結びつけられている。「自分だけの宝」という感じ。「習慣になった」とあるので、一度や二度ではなく、常にそう振る舞うようになった。

それを展翅し、乾いたときに、得意のあまり、せめて隣の子供にだけは

見せよう、という気になった。

今まで見せないできた。でも「得意のあまり」見せようとする。ということから、本当は自慢してまわりたいという子供の素直な気持ちが読み取れる。今まで見せてきていないのに、「見せよう」と僕が思ったということは、よほどそのちようが珍しくて、自慢したかったのかということを表している。「せめて」とあるので、他の友達にはみせないにしても、という意味。

それは、中庭の向こうに住んでいる先生の息子だった。

「先生の息子」ということで、真面目そう。

この少年は、非の打ちどころがないという悪徳をもっていた。

「非の打ちどころがない」のは、良い点なはずなのに、「悪徳」というのはどうしてだろうか。「完璧」は子供にとって憎むものであるからだろうか。

それは、子供としては二倍も気味悪い性質だった。

その子供をひがむ気持ちが入っている。ねたみ、敗北感、何をしても勝てない、というきもちの表れ。

彼の収集は小さく貧弱だったが、こぎれいなのと、手入れの正確な点で、一つの宝石のようなものになっていた。

几帳面な性格。褒めているようではあるが、「小さく貧弱」というマイナス要素も取り入れている、ということから、やはり、その子供を好きになれない「僕」の気持ちが表われている。

彼は、そのうえ、傷んだり壊れたりしたちよりの羽を、にかわでつぎ合
わすという、非常に難しい、珍しい技術を心得ていた。

彼は繊細で、器用な子供であるが、少し神経質な面を読み取ることが
できる。「非常に難しい、珍しい技術」を心得ている「彼」に珍しい
ちようを見せることで、ぎやふんと言わせようと思っている。

とにかく、あらゆる点で模範少年だった。

「あらゆる点で模範」とは、プラスになるはずなのだが、素直にそ
う受け止められていない。「とにかく」は、まとめの表現。褒めるべき
ところが多くありすぎて、挙げ切ることができないという意味が込め
られており、嫌味な感じが読み取れる。

そのため、僕はねたみ、嘆賞しながら彼をにくんでいた。

今は思っていない。過去の自分を語っており、今は思っていないよ
うである。だから当時は、言えなかったが今、素直に言えるのだろう。

この少年に、コムラサキを見せた。

あまり好きではない少年に見せたということは、よっぽど見せたか
ったのだろう。

彼は、専門家らしくそれを鑑定し、その珍しいことを認め、二十ペニヒ
ぐらいの現金の値打ちはある、と値踏みした。

この時点では、僕は鼻高々である。彼を説明している「専門家」は、
子供らしさがない。ちように詳しい。

しかし、それから、彼は難癖をつけ始め、展翅のしかたが悪いとか、右
の触角が曲がっているとか、左の触角が伸びているとか言い、そのうえ、
足が二本欠けているという、もつともな欠陥を発見した。

「もつともな」とあるので、僕もそれが欠陥であることは分かって
いた。「もつともな」欠陥を発見されたことで、「僕」の得意げな気持
ちは打ち碎かれる。彼も彼なりの自分の方が上にいる、というくだわ
りとプライドがあるため、対抗心を燃やし、欠点を挙げることで優
越感を味わいたかったのだろう。

僕は、その欠点をたいしたものとは考えなかったが、こつぴどい批評家
のため、自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。

「こつぴどい」とあるので、「非の打ちどころのない」少年にこれ
もかというくらい、鋭い指摘を受けた。それにより、当初の「ぎやふ
ん」と言わせる計画が崩れ、打ちひしがれている。

それで、僕は、二度と彼に獲物を見せなかった。

褒めてほしかったのに、彼はそうしてくれなかった。そのうちひし
がれた感じは、一層妬みや憎らしさを増大させた。

二年たって、僕たちは、もう大きな少年になっていたが、僕の熱情はま
だ絶頂にあった。

二年後でも趣味は変わらない。いかにはまっていたか、いかに大き
な存在だったかが示されている。

そのころ、あのエーミールがクジャクヤママユをさなぎからかえしたといううわさが広まった。

「あのエーミール」というところから、「あの」とつけることでエーミールに対して何らかの特別な思いを抱えていることが読み取れる。ここで隣人の名前が初めて明らかになる。

今、僕の知人の一人が百万マルクを受けついでとか、歴史家リビウスのなくなった本が発見されたとかいうことを聞いたとしても、そのときほど、僕は興奮しないだろう。

大人になった今でも、今までの人生の中で最も興奮したことだとしている。どれだけ深い興奮かを表している。

僕たちの仲間でクジャクヤママユをとらえた者はまだなかった。

そのあたりでは、そのちようは幻の存在であることが読み取れる。

僕は、自分のもっていた古いちようの本の挿絵で見たことがあるだけだった。

「本」、しかも写真ではなく挿絵であることから、このちようが遠い存在であることを示している。

名前を知っていながら自分の箱にまだないちようの中で、クジャクヤママユほど僕が熱烈に欲しがっていたものはない。

僕が非常に欲していたものを「あの」エーミールがとらえたことに對する興奮と悔しさが表されている。僕の中にいろいろな思いが浮かんでいるだろうことを感じることができる。「今、僕の」興

奮しないだろう。」の文の興奮の説明をしている。

幾度となく、僕は、本の中のその挿絵を眺めた。

「幾度となく」とあるので、何度も何度も眺めた。望んでやまないちようであることがわかる。

「とび色のこのちようが、木の幹や岩に止まっているところを、鳥やほかの敵が攻撃しようとする」と、ちようは、たたんでいる黒みがかつた前羽を広げ、美しい後ろ羽を見せるだけだが、その大きな光る斑点は、非常に不思議な思いがけぬ外観を呈するので、鳥は恐れをなして、手出しをやめてしまう。」と。

「僕」は、友人が語ったことをしっかりと覚えている。それほど僕がクジャクヤママユに対して大きな思いを持っていることがわかる。それは、語った側の友人も同じである。「僕」以外にとってもそのちようは特別であり、このちようがどれだけすごいのか、ということがわかる。

エーミールがこの不思議なちようをもっているということを聞くと、僕は、すっかり興奮してしまつて、それが見られるときの来るのが待ちきれなくなった。

「すっかり」とあるので、完全に興奮した。憎いはずのエーミールだが、クジャクヤママユを見ることの方が「僕」の脳内の大半を占めているため、憎いにもかかわらず、エーミールに見せてもらえらうことを信じ切っている。昔から好きだったちようが、今すぐ隣にある。遠い存在から近い存在への変化が読み取れる。

食後、外出ができるようになると、すぐ僕は、中庭を越えて、隣の家の四階へ上がっていった。

食後、「すぐ」ということから、待ち切れない思いが分かる。「四階」とあるので、値段が高い家か、もしくは少し豪邸かということが予想される。

そこに、例の先生の息子は、小さいながら自分だけの部屋をもっていた。

「エーミール」と言わず、あえて「例の先生の息子」と言っているのはなぜだろうか。恐らく「小さいながら自分だけの部屋」を持っているエーミールへのねたみの感情によるものだろう。

それが、僕にはどのくらいうらやましかったかわからない。

「どのくらいかわからない」とあるので、とてもうらやましかった。ここでもエーミールへの妬みを感じられる。自分の部屋を持っていることも、ちよりの収集についても、僕にとって彼は、憧れの存在である。

途中で、僕は、だれにも会わなかった。

誰も「僕」がエーミールの部屋に入ったことを知らない。

上にたどり着いて、部屋の戸をノックしたが、返事がなかった。エーミールはいなかったのだ。

エーミールはいない。「のだ」とあり、一人であるということ強調している。

ドアのハンドルを回してみると、入り口は開いていることがわかった。

「回してみると」とあり、試みにハンドルを回した。一人で部屋に入るができる。少しの罪悪感があったかもしれないが、それに勝るほどの欲望が「僕」の中にある。

せめて例のちよを見たいと、僕は中に入った。

「せめて」とあるので、エーミールに会えなくてもちようだけは見たかった。エーミールがいないと分かっているにも関わらず、部屋に入った。家に忍び込むくらいそのちよを求めていた。

そしてすぐに、エーミールが収集をしまっている二つの大きな箱を手にとった。

「すぐに」とあるので、ためらいがなく、好奇心だけで行動している。普段見せつけられているから、どの箱か分かったのだろう。

どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのちよはまだ展翅に載っているかもしれないと思いついた。

「やがて」とあるので、しばらくしてから思いついた。どこにあるのだろうと頭を働かせた。箱に見つからなくてもまだ他の所を勝手に探し始める。見たいという気持ちしか読み取れない。

はたしてそこにあった。

「はたして」とあるので、思った通り。

僕は、その上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。

「果てしなく微妙な色」は比喻表現であり、際限がないくらい色が絶妙で繊細だった。それくらいちようが美しく、「僕」が興奮していることが分かる。「残らず」とあるので、隅から隅まで眺めた。エーミールへの感情を忘れて、ただちようの美しさに夢中になっている。

あいにく、あの有名な斑点だけは見られなかった。

「あいにく」とあるので、残念ながら。前文での細やかな表現でどれだけ観察していたかをよく表しているが、その観察が「全てを見ないときがすまない」という欲望に変化した。

細長い紙きれの下になっていたのだ。

紙さえ取り除けば、すぐあの有名な斑点を見ることができると。

胸をどきどきさせながら、僕は紙きれを取りのけたいという誘惑に負けて、留め針を抜いた。

「誘惑に負けて」とあるので、一度は誘惑と戦おうとした。ここで、留め金を抜いたことよって、後に僕の行動が、盗みにつながる確率が上がった。この「どきどき」は、悪いことをして感じる「どきどき」ではなく、「見たい」という思いからくる、ワクワク感を表す「どきどき」である。

すると、四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ず

っとすばらしく、僕を見つめた。

「挿絵のよりは」とあり、挿絵の斑点よりもすばらしかった。本で見ても美しかったが、実物はやはりもっと美しかった。特徴である大きな斑点が目となって、「僕」を見つめているという擬人法である。

それを見ると、この宝を手に入れたいという、逆らいがたい欲望を感じて、僕は、生れて初めて盗みを犯した。

「逆らいがたい欲望」とあるので、理性ではおしとどめられないほどの欲望だった。この時初めて盗みたいと思ったような記述。しかし、部屋をごそごそ探していたときから、少しはその思いもあったはずである。言葉にできない衝動により、自分でも分からないまま盗みを犯した。

僕は、ピンをそっと引っぱった。

「見つかってはいけない」という緊迫した中で、ちようを「そっと」扱っている。盗みを犯しているという自覚がない。

ちようは、もう乾いていたので、形は崩れなかった。

僕はちようが崩れやすいことをよく知っている。後に、形が崩れることの暗示。

僕は、それをてのひらに載せて、エーミールの部屋から持ち出した。

ちようをてのひらに載せている。この時点では、盗みを犯したというより、好きなものを得た感覚であるため、にぎってはいいない。大切に扱っている。

そのとき、さしずめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

「さしずめ」とあるので、当面、さしあたって。その時には、自分が心の底から欲していた、ちようを手に入れたことに対する、満足感、喜びだけを感じている。まだ罪の意識がない。

そのときだ。

場面転換。この語の前後で「僕」の気持ちは変化する。

下の方からだれか僕の方に上がってくるのが聞こえた。

一人きりであるという状況からの変化。罪を意識するきっかけとなる一文である。「聞こえた」とあるので、階段の下のドアを開ける音や階段を上る音が聞こえたのだろう。

その瞬間に、僕の良心は目覚めた。

我に返った。

僕は突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った。

「突然」とあるので、急に、前触れもなく悟った。それまでは、本当に自分が盗みを犯していると、思っていなかった。

同時に、見つかりはしないか、という恐ろしい不安に襲われて、僕は、本能的に、獲物を隠していた手を上着のポケットに突っこんだ。

犯した罪の大きさに気付くも、怯えが先立ってしまい、素直に謝るといふ選択肢はなかった。「本能的に」とあり、反射的に悪いことはと

つさに隠してしまおうと考えた。この時点で、自分の好きなものを得たというより、盗みを犯したことで頭がいっぱいになり、ちようを大切に扱えなくなっている。

ゆっくりと僕は歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。

「大それた」とあるので、常識からはずれたとんでもないこと。落ち着こう、冷静になろうとゆっくり歩いてしたが、罪の大きさに耐えられなくなっている。

上がってきた女中と、びくびくしながらすれ違ってから、僕は胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まった。

「びくびくしながら」とあるので、全身から自分が犯した罪の大きさ、そしてその罪を犯した自分に対する恐怖が表われている。動作がびくびくしていたというよりも、心がびくびくしていたのだろう。今回の「どきどき」は、ワクワク感からくるものではなく、見つかることを恐れ、おびえている、「どきどき」である。

すぐに僕は、このちようをもっていることはできない、もってはいけない、元に反して、できるなら、何事もなかったようにしておかない、と悟った。

「すぐに」とあるが、「すぐに」ではない。罪を自覚してから、一度ちようを隠し、逃げようとしている。「僕」の中で、善と悪が戦っていることが分かる。頭では分かっているのに、体に伝わらない、という

ような感じである。

そこで、人に出くわして見つかりはしないかということに極度に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分の後には、またエミールの部屋の中に立っていた。

さっきまでの「ゆっくり」歩き、「びくびく」すれ違っていた様子とは大きく違い、思ったらすぐ行動に移し、「急いで」「駆け上がって」から分かるように、行動にスピードがある。元に戻さなくては、と思ってから、一刻も早くちようを手放したくなっている。長い記述であるが、「一分の後には」ということから、一分という短い時間での出来事であることが分かる。

僕は、ポケットから手を出し、ちようを机の上に置いた。

ずっと握っていた。

それをよく見ないうちに、僕はもう、どんな不幸が起こったかということを知った。

ずっと盗みを犯したことがかりに気持ちが悪く傾いていたが、ちようをポケットから出したことにより、再び意識がちようへも向いた。「もう」とあり、自分がちようをにぎっていたことを認識し、全てを理解した。

そして、泣かんばかりだった。

泣かんばかりとは、泣きたくなるくらいという意味である。泣きたくなるほど悲しかったが、しかし泣いてはいない。

誰が、泣かんばかりだったのか。ここでは、つぶされてしまったち

よう、または、美しいちようをつぶしてしまった僕であろう。後々このちようの姿を見たエミールも泣かんばかりだったはずである。

前羽が一つと触角が一本、なくなっていた。

詳しい描写。ショックの大きさが伝わる。

ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽はばらばらになっていて、縫うことなんかもう思いもよらなかった。

ちようを意識したことにより、再びちようを大切に扱おうとしている。しかし、一瞬の過ちで、取り返しのつかないことになっている。「もう」とあり、僕は、すでに繕うことを思うこともできないほどばらばらになっていると判断している。

盗みをしたという気持ちより、自分がつぶしてしまった、美しい、珍しいちようを見ているほうが、僕の心を苦しめた。

自分にとって特別なちようをつぶしてしまったことが心を苦しめた。悪人ではなく、ちようの収集家としての気持ちである。まだ罪の重さより、ちようの方が「僕」の心を占めている。

微妙なとび色がかった羽の粉が、自分の指にくっついているのを見た。

「指にくっついているのを見た」とあり、自分の指が犯したことを示している。指に残った粉が罪の意識をより一層深めている。

また、ばらばらになった羽がそこに転がっているのを見た。

模様が特徴の羽なのに、ばらばらになっているのは、良さが全くない。

それをすっかり元どおりにすることができたら、僕は、どんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。

こわしてしまったちやうをどれほど元に戻したいと考えているか、その思いの強さが伝わる。「喜んで」とあるので、何よりも優先している。

悲しい気持ちで、僕は家に帰り、夕方まで、うちの小さい庭の中で腰かけていたが、ついに、一切を母に打ち明ける勇気を起した。

「ついに」とあり、打ち明けようかどうか迷っていた結果、最終的に打ち明けることに決めた。母には素直に打ち明けていることから、「僕」の幼さや素朴さがでてくる。自分の中で抱えきれなかった。

母は驚き悲しんだが、すでに、この告白が、どんな罰をしのぶことより、僕にとってつらいことだったというのを感じたらしかった。

母は怒り、責めはしなかった。「僕」が十分反省したこと、正直に話しただけでも相当なつらさであろうことを、感じたからである。しかし、「僕」の頭の中は珍しいちやうを台無しにしたつらさが占めているだろう。

「そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえのもっているものうちから、どれかをうめ合わせにより抜いてもらうように、申し出るのです。そして、許してもらおうように頼まなければなりません。」

「僕」は、母の言葉をしっかりと覚えていく。それほど身にしてみた

言葉だったのだろう。母は、物事を理解するのが早く、道理の正しい人物である。この言葉で「僕」に少しは罪の意識が生まれたのだろうか。

あの模範少年でなくて、ほかの友達だったら、すぐにそうする気になれたらう。

どうしてエーミールにはそうする気になれないのか。もともと劣等感とねたみを持っていた。「模範少年」と呼ぶことで、また、ねたむ気持ちを表している。

彼が、僕の言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようともしないだろうということを、僕は前もってはつきり感じていた。

あのエーミールが、「僕」のしたことを許してくれるはずがない。「僕」がエーミールを嫌がっていることは、記述から分かるが、エーミールが「僕」を嫌っている記述はない。なのみなぜ、「はつきり」と「僕」は言い切れるのだろうか。「僕」がエーミールをねたむ気持ちから、「どうせ許してもらえない」と思ってしまった。

母は、僕が中庭にいるのを見つけて、「今日のうちでなければなりません。さあ、行きなさい。」と、小声で言った。

責めすぎるといけないと思ひ、「小声」で言った。あるいは、母は、隣に聞こえないように「小声」で言ったのかもしれない。

彼は出てきて、すぐに、だれかがクジャクヤママユをだいなしにしてしまった、悪いやつがやったのか、あるいは猫がやったのかわからない、

と語った。

冷静なエーミールが口を開いて一番に話したことがクジヤクヤママユの話であった。冷静なエーミールがそのような行動を取るといふことは、それほどまでにこの出来事が彼を取り乱させたのであろう。エーミールにとってそれだけショックな出来事であったことを表している。エーミールにとつてもちようが大切であるということがわかる。だが、この段階ではエーミールは僕が犯人だと決めつけた言い方をしていない。

僕は、そのちようを見せてくれ、と頼んだ。

まず告白せずに、確認しようとしている。エーミールの力量でクジヤクヤママユが修復されているかもしれないと考えたのだろうか。クジヤクヤママユを台無しにしてしまったのは自分だと、言い出すタイミングが見つからない。

彼はろうそくをつけた。

二人きりで、ろうそくの光が灯る部屋にいる。妙な雰囲気で、良いことは起こらないことが予測できる。

エーミールがそれを縫うために努力した跡が認められた。

エーミールの努力が、自分のせいであるという実感が持っていない。壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあった。エーミールの努力がうかがえて、より一層悪いことをした感じになるはずだが、やはりまだ客観的である。

しかし、それは直すよしもなかった。

「よし」とあるので、直す方法。もうどうにもならないほど、ばらばらに壊れている。

触覚もやはりなくなっていた。

「やはり」とあり、自分でポケットから出したときにすでに気付いているはずであるが、ここで再確認している。

そこで、それは僕がやったのだ、と言ひ、くわしく話し、説明しようを試みた。

自分がやってしまったことを、全て確認し、やっと話そうとし始めた。「説明しようを試みた」とあるので、説明したわけではない。説明しようとしただけである。

すると、エーミールは、激したり、僕をどなりつけたりなどはしないで、低く「ちえつ。」と舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていたが、それから、「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」と言った。

エーミールは「僕」が予想していた通り、「どなりついたりなど」はしないという大変冷たい大人な対応だった。ここでの大人な対応とは、実際の大人な対応ではなく、あくまで「僕」が考える大人な対応である。「しばらくじっと」とあり、すぐに言ったわけではなく、間に時間があった。僕が続けて何を言うか待っていたのかもしれないし、僕に何を言うべきか考えていたのかもしれない。

僕は、彼に、僕のおもちやをみんなやる、と言った。

予想はしていたが、実際に冷たい対応でゆるされないとすると、「僕」は為すすべがなく、母に言われた通りの方法しか思いつかなかった。しかし、まずは「おもちや」ですまそうとしている

それでも、彼は冷淡に構え、依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので、僕は、自分のちよりの収集を全部やる、と言った。

エーミールの冷淡さと僕の必死さの対比。しかし逆にそれによってエーミールの心中も気になる。償えるようなことではないとエーミールは思っている。「依然」とあり、あいかわらず同じ態度だった。そこでぼくは「ちよう」をやつと差し出そうとする。

しかし、彼は、「結構だよ。僕は、君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、君がちようをどんなに取りあつかっているか、というところを見ることができたさ。」と言った。

馬鹿にしているような態度。怒鳴りはしないが、エーミールの静かな怒りが伝わってくる。

その瞬間、僕は、すんでのところであいつのどぶえに飛びかかるところだった。

「すんでのところで」とあるので、もう少しで。なんとか押しとどまった。なぜ、飛びかかろうとしたのだろうか。それは、自分のしたことを冷静にエーミールが痛いところばかりをついてきたからである。

僕は悪漢だということに決まってしまう、エーミールは、まるで世界のおきてを代表でもするかのようになり、冷然と、正義を盾に、あなどるように僕の前に立っていた。

「僕」対「エーミール」イコール「悪」対「正義」と読み取ることができる。自分を悪と置いていることで、エーミールに怒りをおぼえることは間違いだと「僕」自身も分かっている。

彼はののしりさえしなかった。

「さえ」とあるので、ののしることはもちろん何もなかった。エーミールは立っているだけで、やはり怒ったり、怒鳴ったりしなかった。

ただ僕を眺めて、軽蔑していた。

エーミールは冷たい目で「僕」を見つめていた。そして、自分の「正義」が絶対であるという自信から、「僕」を認めようとせず、軽蔑の目で見続けた。

そのとき、初めて僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った。

「僕」がこの一連の出来事で学び、言いたかったこと。エーミールの軽蔑の目は二度と戻らないと分かった。

母が根掘り葉掘りきこうとしないで、僕にキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。

母は「僕」の様子を見て、全てを悟った。「僕」が反省していること

も、よく分かっていたため、かまわないようにした。

僕は、「床にお入り。」と言われた。

何も話したくないという「僕」の雰囲気をも母が感じて言った一言。

だが、その前に、僕は、そつと食堂に行つて、大きなとび色の厚紙の箱を取つてき、それを寝台の上に載せ、やみの中で開いた。

「僕」にとつておそい時間であるのに、今やつてしまおうとしている。それほどすぐに忘れてしまいたい出来事なのだろう。もしくは、結局エーミールに何の償いもできなかったことが引っかけり、いてもたつてもいられなくなったのだろう。「そつと」とあり、母に見られないうちに行つた。

そして、ちやうを一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶしてしまつた。

「一つ一つ」とあり、いっぺんにすべてをつぶしたわけではない。時間をかけて一つずつつぶした。「指で」とあるので、手のひらでなく、指先ですりつぶすようにつぶした。「粉々に」とあるので、壊すだけでなく、すべてがつぶれるまで入念に押しつぶした。僕の心の中のぐちゃぐちゃ感が示されている。罪悪感。償いができず、もやもやした感情が「僕」にこうさせた。申し訳ないというより、どうしようもない、もう見たくないという思い。

三 考察

(一)「僕」の役割

「少年の日の思い出」において「僕」は、解釈の難しい人物として描かれているところが多い。特に人が関係すると、「僕」の性格における謎が強調されている。「僕」にとつてちやうは、簡単に言葉で言い表すことができないくらいかけがえのない存在のはずである。それなのに、大好きなちやうのことでも「僕」は人に関わると、苦しめられていると言つても過言ではないほど、人と関わる場面ですらい思ひをししている。なぜ、「僕」はこのように描かれているのだろうか。

客観的に見て「僕」は、一つのことにかなり熱中できる熱い純粋な心の持ち主であり、子供らしい子供であるということが読み取れる。ここには、マイナス要素は見受けられない。しかし、人が関わると、自分の箱と他の子の箱を比べ、自分の発見物は妹にしか見せなくなつたり、やけにエーミールのことを嫌つていて、彼の説明をするときに使っている言葉がマイナス表現ばかりであつたりする。特にエーミールに対しては、自分のちやうに難癖をつけられたことによつて、絶対にもう二度と見せないと意地を張つたり、子供らしさが裏目に出てしまい、妬みや憎しみばかりを抱いているような印象を受けてしまう。

ここで、エーミールとの対立を見てみる。「僕」にこのような妬みや憎しみの印象がなければ、純粋な少年と、子供らしくない少し変わった少年の対立となり、とても単純で分かりやすい。しかし、これに「僕」のマイナスイメージが加わるため、エーミールの気持ちも分かるが、「僕」の気持ちも分かる……一体どつちが悪いのか分からない、という状況になつてしまい、大変解釈が難しい。

ここまでの「僕」だけでも解釈が難しいのだが、さらに、最後には大好きだったはずのちやうを全てつぶしてしまう、という驚きの行動を起こし、さらに「僕」の人間性について理解が苦しくなっていく。

作者は一体「僕」を通して何を伝えたいのだろうか。

素直に「僕」だけを見て読むと、自分の好きなことばかりに没頭し、人間関係やその他様々なことをあいまいにした結果、自分の好きなことでさえ苦しみの要素となってしまうと、と解釈できる。つまり、「自分のことばかりでなく、相手の気持ちも考えよう」という教訓が、「僕」の中に隠されているのである。中学生で思春期真っ只中の生徒にとつて、友達との関わり方を考えることができるという点に、「僕」のこのような性格の特徴がある。

(二) エーミールの役割

エーミールは最後の最後まで、子供らしくない子供の姿で描かれていた。その部分で見ると、「僕」とは対照的な少年である。本文中の「僕」とのやり取りの中で、その子供らしくない性格は十分と言ってよいほど一目瞭然である。本文でも示されていたように、エーミールは一般的な「良い子」であった。それにも関わらず、「模範少年」「非の打ちどころがない」というような言葉を使って、「僕」はエーミールをマイナス評価を伴って説明している。それは、「僕」がエーミールに対して、ねたみや憎しみを持っているためであるが、そもそもなぜ、一般的に「良い子」とされるエーミールに「僕」は、そのような感情を抱いたのだろうか。

この感情は、多くの人が中学生の時代に感じたことのある感情なのかもしれない。「なんであの子ばかり褒められて、自分は怒られてばかりなんだろう」という、この気持ちを最大限に表現するために、エーミールは存在している。だから、この「少年の日の思い出」においてエーミールは、徹底的に「模範少年」として描かれているのである。

そして、そのエーミールに対する「僕」の感情から、読み手である中学生は、ここでもまた友達との関わり方を考えることができる。

(三) ちようの役割

この作品のタイトルである「少年の日の思い出」とは、つまりちようの思い出のことである。作品の最初から最後までほとんど登場していたちようは、各場面でそれぞれの役割を持っている。

まず、最初の大人二人がちようについて話している場面では、これからの回想へと導くための手段であることが分かる。ここでちようが登場することによって、「わたし」と「客」の二人ともが幼い日の思い出として、ちようの思い出を持っていることが明らかになっている。

次は、「僕」のちよう集めの思い出の入り口となったところの回想シーンである。ここでちようは、大変美しく描かれており、いかに「僕」がちように対する熱い思いを持っていたか、ということを表現している。ここでのちようは、「僕」にとつてちようが不可欠であり、かけがえないものであることを読み手に読み取らせるための役割を担っている。

そして、初めて隣の家の少年との思い出が語られている場面では、ちようは「コムラサキ」として登場している。「僕」と少年の間にちようを挟むことによつて、二人の関係が良くないこと、「僕」は少年に対して憎しみを持っていることが明確になっている。

次に登場した、問題の「クジャクヤママユ」は、一番重要な役割を果たしたちようである。ちようをめぐる、少年二人の感情は大変深く、解釈が難しい。しかし、このちようが登場したことにより、二人の感情がどんどん浮かび上がり、最終的には、(一)(二)で述べたように、

読み手である中学生の生徒が、友達との関わり方を考えることができる。

ここまで、大まかな場面でのちよりの役割を考えたが、この作品全体を通して見ても、ちよりの役割は各場面で果たされている。「ちより」、「獲物」、「宝」といったように、様々な表現で登場するちよりは、時には美しく、読み手までもが魅了される存在である。また、時にはマインスイメージを持ち、「僕」を苦しめる存在である。また、時には「僕」の手に入れたいという欲望をあらわにさせ、「僕」やエーミールにとつてちよりがどれだけ大切なものであるか、ということ表現する存在でもあった。

(一)(二)で述べた「僕」とエーミール、二人の性格や特徴はちよりという存在がなければ、明確に表現されなかっただろう。つまりそれは、この作品で伝えたかった「友達との関わり方を考えさせる」ことが果たされないということである。始めにも述べたようにちよりはこの作品の最初から最後までずっと登場し続けていた。それは、作品の全てを背負っているということの表れだったのではないかと推測される。

